

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際看護学部 名前：矢野 朋子 作成日：2024年12月02日

1. 教育の責任

地域で暮らす様々な文化背景を持つ人々と家族に対して日常生活援助や社会資源の活用や在宅サービス調整によって在宅生活の質向上を支える看護師を養成している。

2. 教育の理念

地域で暮らす人々と支える家族に対する必要な日常生活援助、在宅サービス調整や多職種連携について学生の学習効果が上がるようにロールプレイを用いた演習を取り入れた教育を行っている。また、病院からの在宅移行支援、地域との連携について理解を深める教育や実習を展開している。

3. 教育の方法

教育の目的と目標

講義では訪問技術に始まり、住環境、福祉用具の活用、排泄、摂食嚥下や低栄養に関するケア、ケアマネジメント、介護予防、退院支援、終末期ケアと退院後に地域に戻られる療養者とその家族への支援を考えるために地域で展開されている看護を知り、今後の受持ち患者や臨床場面において家族への支援につながるよう教授している。これらの講義内容から関心の高い学生が将来地域で訪問看護師として訪問看護ステーションを開設し、保健師職を目指すような教育を行っている。

教育実践

演習では4～5名程度の小グループにて訪問技術、摂食嚥下障害者に対して英語によるコミュニケーションでの摂食嚥下障害の観察からトロミジュースの作成、胃瘻の観察、栄養剤注入等の在宅看護で行われている演習を実施している。摂食嚥下障害者に対して英語によるコミュニケーションでは学生自身で英語シナリオを考えて、療養者や家族との会話や反応、表情を見るように努力していた。また、これらの講義内容は4年生の在宅看護学実習で役立つ内容としている。

4. 教育の成果

学生は、在宅看護に必要な訪問技術やコミュニケーション技術、食・栄養支援等を行い、演習後の課題を取り組んでいた。演習後に療養者役、家族役、訪問看護師役、観察者役とそれぞれの立場で意見交換を行い、その内容は課題にも反映されていた。在宅看護実習では、これらの演習で得た学びから退院後の療養者とその家族に対するケアを考慮することを最終の実習報告会で多くの学生からの発言が見られた。

5. 改善への努力と今後の目標

小グループでの演習であったためグループ間で協力して演習に取り組むことができていた。しかし、関心が低く、習熟度の低い学生がいたため課題内容から学びの浅い学生も存在した。今後は、このような学生に対して療養者や家族が置かれている現状理解や退院されてその方々を支えるために看護職として何が必要であるのか考えられる課題設定や講義内容としていく。

【添付資料】